HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道和種馬を使った調教実習
Author(s)	平, 克郎
Description	研究・技術発表
Citation	北海道大学農学部技術部研究・技術報告, 6, 18-20
Issue Date	1999-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35375
Type	departmental bulletin paper
File Information	6_p18-20.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

＜研究・技術発表＞

北海道和種馬を使った調教実習

附属牧場　平　克郎
（環境・飼育系　家畜飼養班）



1　はじめに

平成4年から、始まった和種馬を使った調教実習を紹介します。

馬は、人よりも大きく力が強い、その取り扱い次第では人に対して非常に危険な動物になります。しかし、馬はもともと大人しく、人に慣れやすい動物です。馬の性質や特徴を理解して接し正しく取り扱う事が大切です。そこで、馬などの大動物に触った事が無い学生に、和種馬の調教を通じて馬の性質や特徴そして、取り扱いや接し方を体で覚えさせることが目的で、この実習がはじまりました。

使われる馬は、当牧場で生産された北海道和種馬4才の牝馬です。北海道和種馬は、わりと小柄で取り扱いが易しく性格も大人しい馬です。学生は教養から畜産科学科に移行して来たばかりの2年生で、大動物に触ったことのない学生がほとんどです。

約1週間行う冬期間（2月の中頃）の実習の中で、1日2時間を4日間使って調教されていない馬を乗れる様に調教します。調教は、ハミ馴致、腹帯馴致、引き運動、調馬索による運動、馬への加重、加重した状態での引き運動、騎乗、騎乗した状態での引き運動、装鞍、騎乗した状態での調馬索、最後に単独での乗馬になります。

2　調教

ハミ馴致・腹帯馴致

実習 1 週間ぐらい前から、ハミ馴致、腹帯馴致を開始します。ハミは、馬の口に噛ませる物で乗馬のとき騎乗者の意思を伝える道具です。腹帯は、装鞍するとき馬の胴に巻く物です。これらは、馬にとってストレスのかかる物なので、あらかじめ馬に付けたり、外したりして慣らします。学生が来る前の準備はこれだけです。

引き運動

学生が実際に調教開始するのは、引き運動からです。引き運動は、人がロープで馬を引っ張り運動させます。引き運動は、人と馬との信頼関係を築く大事な調教です。馬に常に声をかけ、馬をリラックスさせ、出発、減速、停止など人の命令を理解させます。

調馬索

馬が十分にリラックスし、ある程度なれたら調馬索による運動に移ります。長い引き綱をハミに付け、人を中心にし円を描く様に馬を回し運動させます。ハミに力を加わえ、ハミによって馬が動くようにします。

加重

馬が十分にリラックスしてきたら、馬に徐々に人の重みを加える加重をします。馬の背中に腹で乗りぶら下がります。このとき、ぶら下がった人は馬の体を手や足を使って腹や尻などを触り、触られることに馬を慣らします。

加重しての引き運動

馬が人の重み、また触られる ことに慣れたら、そのまま人をぶら下げた状態で引き運動をします。このとき馬は、重いものを担いで歩くことから逃れようとして上に乗ってる人を落とそうとしたり、歩かなくなったりします。引いている人は、馬が暴れない様にしっかり押さえ、馬を歩かせ運動させます。また馬に乗ってる人は、落とされない様にしなければなりません。 一度馬が人を落とすことを覚えると、楽になろうと何度も落とそうとします。もし落とされたら、馬が諦めるまで、くりかえし調教します。

騎乗・騎乗しての引き運動・装鞍

馬に加重をかけ落ち着いて歩くようになれば、騎乗します。引く人が補助をしながら乗り手が発進、右曲がり、左曲がり、停止などを、たずなを使って馬に教えます。馬が乗り手の言うことを聞くようになったら、装鞍して騎乗しての引き運動をくり返します。

騎乗しての調馬索

馬が鞍、鐙、乗り手の言うことを聞くようになったら、補助をしている人の引き綱を徐々に長くしていき、調馬索での騎乗をします。ここまできて馬が乗り手の命令を十分にこなすようになれば、引き綱をはずし単独で乗馬をします。

単独での騎乗

単独での乗馬で、馬が落ち着いて乗り手の命令を十分にこなすようであれば、北海道和種馬を使った調教はこれで終了します。

3　最後に

調教実習を終えて、学生が動物に対して（少なくても馬には）危険を認識し、接し方もかなり変わり、実習の目的を十分に果たしていると思います。また、この実習は附属牧場の特徴を十分に生かした実習です。今後もこの牧場だから出来る実習を学生に提供していきたいと思います。

終わりに、この発表にあたり御協力いただきました秦　寛助教授、同じ職場の皆様にお礼を申し上げます。